

本発表の目的は、ネル・ノディングズ（Nel Noddings, 1929-）の主著 *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education* に照準を絞り、ノディングズがそこで唱道しているケアの倫理の限局的な性格を露わにするところにある。

care ということばの語義が示しているように、ケアは、端的に言えば、気遣いという意識の様態を指し示している。とはいえ、わたしたちがほかのひとをケアしているとき、わたしたちは、そのひとをたんに思いやっているだけではない。すなわち、ノディングズによれば、わたしたちは、ほかのひとの苦境を目の当たりにしたとき、ケアするひととして、あるひとへの憐憫を覚えると同時に、「わたしはなにごとかをしなければならない」

（Noddings 2003, 150）とも感じている。この義務的な感情に駆り立てられているから、わたしたちは、ほかのひとの苦痛を和らげるための具体的な行為に着手できる。しかし、当の義務的な感情には絶対的な拘束力がない。たとえば、眼前で苦しみを訴えているひとがわたしたちの嫌悪している人物であるとしよう。なるほど、そのひとの苦境は、わたしたちのこころのなかに、援助しなければならないという思いを惹起させる。ところが、わたしたちは、そのひとを嫌っているので、助けたくないとも思っている。そのような場合に、ノディングズは、後者の否定的な思いが前者の義務的な感情に打ち勝つ可能性を認めている（Noddings 2003, 83）。このように、「わたしはしなければならない」という指令の受諾は、ときとして、困難である。

だからといって、好ましくない人物を見捨ててよいわけではない。ノディングズは、こう主張する。「はじめの「わたしはしなければならない」が生起すれば、わたしには、それを受容する責務がある」（Noddings 2003, 84）、と。言い換えれば、わたしたちは、支援したくないと思っていたとしても、ケアするひととして奮起し、ほかのひとに手を差し伸べるべきである。ノディングズは、この責務に応答するための奮闘を、「倫理的なケアリング」

（ethical caring）（Noddings 2003, 80）として際立たせている。だから、スロートの *The Ethics of Care and Sympathy* に倣って、ノディングズのケアの倫理をこう要約できもする。「ノディングズは、ケアの倫理を、個人がケア的に行為することへの要求、あるいは、勧告として見てとっている」（Slote 2007, 10）、と。すると、当の倫理は、一見したところ、つぎのように要請しているように思える。すなわち、ほかのひとが苦境にあるとわかりさえすれば、どのような場合であっても、そのひとのためになにかしなくてはならない、と。しかし、ノディングズのケアの倫理は、このような無制約的な要求を掲げてはいない。たとえば、ノディングズは、アフリカの飢えた子どもたちをケアする責務はない、と明言している（Noddings 86, 2003）。この言説が露わにしているように、ノディングズの枠組みは、むしろ、わたしたちが倫理的に応じるべき責務に一定の制限を設けようとしている。とはいうものの、そのもくろみをとおして、ノディングズは、ケアしなくてもよい場合を認めている。ケアしないことを正当化できる論拠は、いったい、どこにあるのであろうか。

本発表では、まず、ノディングズの言うケアが「ケアリング」（caring）という関係の端緒であることを確認する。そのうえで、ケアするひとの責務に焦点を定めながら、わたしたちがその責務を果たしたと言える条件を洗い出す。こうした考察を踏まえて、ノディングズがケアするひとの責務に限界を設定している理由を明らかにしながら、ノディングズのケアの倫理の特質を浮き彫りにしたい。